対談

中途失聴の松森果林さん

「字幕が付いて初めて情報のマイナスから“ゼロ”になったのです」

Matsumori Karin
ユニバーサルデザインアドバイザー、内閣府 障害者政策委員会委員

総務省課長の藤野克氏

「字幕番組の制作に加え、来年度は字幕CMの放送に関する機器設備も助成対象にしました」

Fujino Masaru
総務省情報流通行政局地上放送課長

「第1回字幕付きCMセミナー」で講師として出席した総務省情報流通行政局地上放送課長の藤野克氏とユニバーサルデザインアドバイザーの松森果林さんに、動き出した字幕付きCMを当たり前のサービスとするための課題などを話し合ってもらった。松森さんは10代で聴力を完全に失った中途失聴の立場から、長年に渡り字幕付きCMの必要性を訴え、実現へ取り組んできた方だ。

（構成・写真：古山智恵・本誌編集部）

字幕が新しい表現手段の一つになる!?

松森　第1回字幕付きCMセミナーは、全国の放送事業者、プロダクション、広告主のテレビCM関係者だけでなく、当事者である聴覚障害者らも含め約250人が参加して、字幕付きCMを考える初めての会となりました。CM業界のそれぞれの関係者が一堂に集まり、さらに視聴する聴覚障害者も参加するというオープンな会となりましたが、ご参加されていかがでしたか。

藤野　広告主や広告業者、放送事業者などCMの送り手と、視聴する聴覚障害者の受け手が一緒の場で考える機会となったことに歴史的な意義を感じています。両者が字幕付きCMの有用性や課題を共有することができました。

とくに松森さんのプレゼンでは、音声のないCMがどういうものか、会場で実際に音声のないCMを流し、参加者が音声のないCMを実体験しましたが、非常に印象的でした。実際に体験してみると、頭で考えていたことと大きく違いました。メッセージがわかりにくいだけでなく、取り残されたような、置いてきぼりを食ったような、そんな感覚になったのです。ここが一番の問題だと感じました。こうしたCM体験を共有した上で、話し合いの場が持てたことが大きな成果だと考えています。

松森　伝わらないだけでなく、あの置いてきぼり感を身をもって感じてもらう、それが私の狙いでした。だからCMにも字幕が必要なんだということを一番伝えたかったのです。字幕が付くことはマイナスが“ゼロ”になるだけのことです。でもそれは私たちが社会参加の一つとして望む大きなゼロなんです。

CMに字幕を付けてほしいと提案し始めてから約18年になるのですが、事が動き始めたのは2010年からでした。それまでは必要であるとわかっていても、できない理由を提示されるだけでした。どうしたら行動に移してもらえるかを考え、2つの事を大切にやっていこうと決めたのです。一つは、一人ひとりの気持ちに訴え、さらにお互いにとってメリットを提案することです。もう一つが互いに歩み寄る機会をつくるということでした。一方的に主張するのではなく、相手の立場を知ること。そのため私も実際に現場を見学して皆さんの話を聞きました。ほんの15秒のCMが大変な過程を経て作られていることを知ると感謝の気持ちでいっぱいになる、その思いを伝える。そうすると互いのモチベーションが上がり、実現への良い循環が生まれてきたように感じています。

藤野　私は昨年の夏に着任したのですが、着任後、字幕付きCMについていろいろな立場の人から話を聞きました。関係する皆さんが前向きな意欲を持っていて、それが字幕CM協議会の発足につながったのだと思います。

松森　字幕CM協議会の発足には、総務省の支えが大きかったと思っています。

藤野　総務省というより、皆さんの積み重ねてきた努力の中で、字幕付きCMを実践することで生まれる課題、例えば業務フローの増大、追加の人手確保などに対して見通しが付いてきたからではないでしょうか。今回のセミナーで電通ダイバーシティ・ラボの佐多直厚氏が具体的な推奨ルールについて話されましたが、ルール化されてくると、字幕は情報を補うものだけでなく、新たな表現方法の一つだということに気づいたと感じました。

松森　日本語は擬態語・擬音語が非常に豊かです。飲み物を飲む音にしても、グビグビとか、ゴクゴクとか、いろいろな表現があります。実際の音を聞いた経験がない聴覚障害者にとっては擬態語・擬音語の字幕化は新鮮な発見になります。また、ルビも重要です。例えば関ジャニ∞の「∞」ですが、音を聞いていなければ「エイト」と読めません。企業名の漢字も読み方が幾通りもあるので迷います。また、書体によっても雰囲気が違ってきます。さらに音楽を伝える「♪」マークや歌詞を踊らせた表記にすることで軽快な音楽を表現できるとワクワクします。当事者を加えて議論できる場があるといいなあ、と思っています。

字幕付きCMの安定した放送のための設備を助成対象

藤野　放送行政推進の根幹の考えは、誰もが情報入手できる放送の実現です。そのためにはさまざまなニーズを吸い上げ、字幕付きCMの意義を理解し、送り手の課題をクリアしていくことが必要です。総務省では今年2月から「字幕付きCMに対する評価・効果等に対する調査研究」を行い、CMに字幕を付けることで視聴者にどういう効果があるかを調査し、結果を公表します。

松森　当事者意見を求めるとき、さまざまな職業、幅広い年齢層、性別にとらわれることなく、できるだけ幅広く多くの人から意見を聞いてください。聴覚障害者は、電話や会話にバリアがあるため不満や要望があっても我慢してしまう人が多くいます。アンケートやパブリックコメントではメールやFAXのほか、手話対応ができる環境で一人ひとりの肉声を聞いてほしい。主婦や子どもも入れ、バランスよく声を集める工夫も大事だと思います。

3団体で構成する字幕CM協議会の運営委員メンバーも講演に集中

藤野　パブリックコメントとは広く意見を集めるために始められたもので、総務省はこの分野のパイオニアですが、方向性についての意見だけではなく、アイデアを募るとか、発想を変えた聞き方などの工夫が必要ですね。

松森　意見交換できる場があると良いですよね。地域の手話サークルや講習会、ろう学校、当事者団体の定例会や勉強会などの小さな集まりにもCM字幕の関係者に足を運んでもらいたいと思っています。結局は、こうしたことの積み重ねで互いが歩み寄ることが字幕付きCM実現の一番の近道だと思います。

藤野　CMの字幕を付けることや、放送するためにコストが掛かります。総務省としてこれまでも字幕番組・解説番組等の制作費の一部を助成してきましたが、それに加えて2015年度は字幕CMチェッカーなどの放送局設備も助成対象に含める予算案を作っています。このようにコスト面でのハードルを下げることで、字幕付きCMの推進をより一層図っていきたいと考えています。

松森　関係3団体が一緒になって字幕CMを推進する協議会立ち上げたことに大きな期待を持っています。この場を通じて放送のユニバーサル化を推進するためにいろいろなことができると考えています。例えば、字幕の役割についても正しい理解はまだ不十分です。音声をそのまま字に起こせばいいという単純なものではありません。電通の佐多さんが話されていましたが、新たな表現の方法にもつながるということに気づきました。字幕のさらなる理解を深めるために字幕CM協議会の存在は大きいと思っています。

藤野　今日は松森さんと話ができて大いに刺激を受けました。字幕付きCMの放送をすべての時間帯で実現できるようできる限りの支援策を考えていきます。

松森　私は、総務省の課長という重責を担う方と率直に話しができたことを大変うれしく、また心強く思っています。まだ課題も多くあります。手話放送の対応や、視覚障害者の情報保障である解説放送をCMでどう実現するかなどです。テレビをつければあらゆる番組に、字幕、手話、解説の放送があり、多言語の選択もできる、そんなユニバーサルな放送を期待しています。

藤野　今日は率直な意見をお聞きしました。今後も厳しい意見や指摘をよろしくお願いします。

松森　お任せください（笑）。藤野課長とお話して、総務省としてのしっかりした意思を感じ、また心強く思いました。